

中学校のダンス授業における
指導内容の違いが生徒に及ぼす影響：
即興型ダンスと習得型ダンスの比較を通して

山口 晏奈・梅垣 明美・白井 麻子

Effects of Differences in Instructional Content in
Junior High School Dance Classes: Comparison of
Improvisational and Mastered Dance Classes

Anna Yamaguchi, Akemi Umegaki, Asako Shirai

神戸医療未来大学紀要 第24巻 第1号

(令和5年12月)

<研究ノート>

中学校のダンス授業における指導内容の違いが生徒に及ぼす影響： 即興型ダンスと習得型ダンスの比較を通して

山口 晏奈¹⁾・梅垣 明美²⁾・白井 麻子³⁾

Effects of Differences in Instructional Content in Junior High School Dance Classes: Comparison of Improvisational and Mastered Dance Classes

Anna Yamaguchi¹⁾, Akemi Umegaki²⁾, Asako Shirai³⁾

This study examined how differences in dance class instructional contents and more specifically, between classes where students learn improvisational expressions and classes where they mastery learning of ready-made dance movement, in terms of the following: (1) The self-evaluation of students, (2) the state of mood of students, and (3) the psychological states of students with high and low self-evaluation.

The results suggested that learning ready-made dance movements may make it easier for students to understand and evaluate other students' movements. In addition, it was suggested that there was no difference in mood between students with low self-evaluation and students with high self-evaluation in dance classes with different instructional content, by devising lessons in which the students themselves can perceive any movement positively.

Key words : creative dance, instruction methods, improvised expression
創作ダンス, 指導法, 即興表現

1. 緒言

2008年に告示された中学校学習指導要領解説保健体育編（以下「要領」と略す）¹⁾において、ダンスを含むすべての領域が必修となった。ダンスは、「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」で構成されている。創作ダンスの採択率は、フォークダンスより高いが、現代的なリズムのダンスよりも低いという報告がある²⁾⁻³⁾。

2008年と2017年、それぞれに告示された要

領⁴⁾では、創作ダンスの目標として、第1学年及び第2学年では、「多様なテーマから表したいイメージを捉え、動きに変化を付けて即興的に表現」して踊ること、第3学年では、「表したいテーマにふさわしいイメージを捉え、個や群で、緩急強弱のある動きや空間の使い方に変化を付けて即興的に表現」して踊ることが示されている。創作ダンスの学習に関しては、「外にある内容を身につけていく『習得型』学習ではなく、ゴールフリー的な『探求型』学習を基本とする特徴もあ

1) 神戸医療未来大学 (Kobe University of Future Health Sciences) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

2) 同志社女子大学 (Doshisha Women's College of Liberal Arts) 〒610-0395 京都府京田辺市興戸

3) 大阪体育大学 (Osaka University of Health and Sport Sciences) 〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1番1号

る』⁵⁾とし、定型の動きを習得するのではなく、即興表現や作品創作が目指されるといえる。

しかし、ダンス未経験やダンスに苦手意識を持つ生徒にとって、動きの模倣は易しいが、創作は難しく感じる傾向がある⁶⁾。また、保健体育科教師を対象とした調査でもダンス（動き）の知識が不足していることが児童・生徒の動きの引き出し方など指導の障害になっているとされている⁷⁾⁻⁹⁾。実際の創作ダンスの授業では、作品発表や作品鑑賞に比べて、多様なテーマを手掛かりにした即興的な創作学習を取り入れている学校は少ない²⁾⁻³⁾。

以上のことから、即興的に踊る創作ダンスの授業の手立ての1つとして、動きの見本となるような定型の動きを提示し習得する時間を設け、多様な動きおよび多様な表現の仕方を生徒に学ばせることが有効ではないかと考えた。実際に高田（2014）¹⁰⁾は、現代的なリズムのダンス授業において定型のステップの学びが、生徒の技能面に良い影響を与えることを明らかにしたが、創作ダンスにおいて定型の動きを習得する学習の有効性を検証した研究は管見の限りみられない。

そこで本研究では、ダンス授業における指導内容の違い、具体的には要領の目標であるイメージを捉え即興的に踊るダンスを学ぶ授業（以下「即興型ダンス」と略す）と定型の動きを習得するダンスを学ぶ授業（以下「習得型ダンス」と略す）の違いが、第1にダンス授業に対する生徒の自己評価に、第2にダンス授業を受けた生徒の心理状態（気分）に、第3にダンス授業に対する自己評価が高い生徒と自己評価が低い生徒の心理状態（気分）にどのような影響を及ぼすかについて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

大阪府内の公立中学校第3学年女子(32名)に実施したダンス授業（3時間）を対象とした。実施時期は、2018年1月15日、1月22日、2月5日であった。

授業を担当する50代女性の保健体育科教師は、ダンスを専門としておらず、十分な技術指導が難しい状況にあった。そのため、本ダンス授業ではティーム・ティーチングを採用し、20代女性外部講師をT1に、50代女性保健体育科教師をT2とした。また、今回はダンスを専門とする外部講師（T1）が学校長の許可を得て授業を担当した。

単元計画においては、1時間目に、即興型ダンス1として、「忍者」を題材として、素早くメリハリのある動きを表現することを学ばせた。2時間目は、即興型ダンス2として、「掃除」などの日常の動きをテーマとして、緩急や強弱をつけた動きを表現することを学ばせた。3時間目は、習得型ダンスとして、創作ダンスに活用でき、音楽のイメージに合わせて振り付けた定型の動きを、音楽のテンポに合わせてのびのびと力強い動きを表現することを学ばせた。毎時間、準備運動かねてリズムに乗ってウォーミングアップを行った。また、授業の最後には、お互いの動きを見合う場面を設けた。表1は、単元計画を示している。

実施時期：2018年1月15日、1月22日、2月5日（計3回）

対象：公立中学校第3学年（32名）

場所：公立中学校体育館

授業実践者：T1：女性外部講師，ダンス歴24年

T2：女性保健体育教師，ダンス歴なし

表1 単元計画

| 段階 | 第1次（即興型ダンス1） | 第2次（即興型ダンス2） | 第3次（習得型ダンス） |
|-----------|---|---|--|
| 導入 3分 | ○集合・挨拶・本時の目標の確認 目標：忍者のように素早くメリハリのある動きで踊る | ○集合・挨拶・本時の目標の確認 目標：日常の動きを使って変化のある動きで踊る | ○集合・挨拶・本時の目標の確認 目標：曲に合わせて、のびのびと力強く踊る |
| 展開 32分 | ウォーミングアップ リズムに乗って準備体操 | ウォーミングアップ リズムに乗って準備体操 | ウォーミングアップ リズムに乗って準備体操，ステップの練習 |
| | ○Move-Stop（動く－止まる） ○リーダーの真似っこ 3人で1組になり忍者のイメージの真似をする | ○2人組でミラーリング ○部屋をエア－掃除 ○リーダーの真似っこ 4～5人でひし形の隊形になり，先頭に立つ人の真似をする | ○習得型ダンスの練習 基本的な動き，質感の表し方，感じの込め方，全身の使い方，リズムの取り方，空間の使い方を含ませたひとまとまりの動き |
| 10分 | ○見合いっこ | ○見合いっこ | ○見合いっこ |
| 整理 5分 | ○学習ノートの記入 ○反省と次時の確認 | ○学習ノートの記入 ○反省と次時の確認 | ○学習ノートの記入 ○反省と次時の確認 |

単元：1時間目：即興型ダンス1（忍者をテーマとして，素早くメリハリのある動きを表現）

2時間目：即興型ダンス2（日常の動きをテーマとして，緩急や強弱をつけた動きを表現）

3時間目：習得型ダンス（定型の動きを，曲に合わせてのびのびと力強い動きを表現）

響が比較的少ないと推察される即興型ダンスを先に実施することとした。

また，本研究では公立中学校を対象とすることから，即興型ダンスにおいても習得型ダンスにおいても同等に生徒の動きを引き出すため，次のような手立てを行った。一つ目として，ダンスを専門とするT1がダンスの指導を行い，二つ目として，生徒が動きやすくなるように動きの見本や例示をできるだけたくさん見せ，三つ目として，指導者が生徒の動きを引き出すような言葉がけを行った。

2. 2. 1 指導内容が異なる2つの授業の設定

本研究では，即興型ダンスを1・2時間目に，習得型ダンスを3時間目に実施した。生徒には，即興的に踊ることよりも定型の動きを覚えることの方が好まれる傾向が認められるため⁶⁾，先に習得型ダンスを行うことにより生徒が「ダンス授業とは，定型の動きを覚えるもの」などといった先入観を持つことが予想された。本研究では，即興型ダンスと習得型ダンスの違いが生徒に及ぼす影響を検証することを目的としたため，後の学習への影

2. 2. 2 即興型ダンスを学ぶ授業

即興型ダンスの内容について，ダンス未経験者であってもイメージをすぐに動きにかえて表現できる⁴⁾よう，「忍者」や「掃除」などの題材を取りあげた。また，動きを誇張したり，変化を付けたりにして表現すること⁴⁾を生徒に身につけさせるため，素早くメリハリのある動き，および，緩急や強弱をつけた動きを表現するように指導した。

具体的には，指導者は生徒が動きやすくなるように以下の具体的な手立てを行った。第

1に、「忍者」や「掃除」のイメージから想像できる動きの例を実際に行ってみせた。第2に、「忍者」のイメージで体育館の中を走り、笛の合図が鳴ったらポーズをとるといった指導をするときに、「忍者はもっと速く走るよ」、「敵から隠れるようにもっと腰を低くして走ろう」や、「敵から気づかれないように止まってポーズ」、「敵から素早く逃げようとするポーズ」といった生徒の動きを引き出すような具体的な言葉がけを行った。第3に、生徒にはどんな動きをしてもいいことと、立ち止まらずに考えることを指導した。

2. 2. 3 習得型ダンスを学ぶ授業

習得型ダンスの内容について、本研究では生徒に「イメージを深めた表現」⁴⁾を行わせるため、要領⁴⁾に示されている動きの例示を参考に、「ALIVE」の曲に合わせて8呼間×8(41秒間)のダンスとした。ダンスの内容には、ジャンプ、ポーズ、ステップ、回転などダンスの基本的な運動要素、緩急(時間的要素)、強弱(力の要素)、固さや柔らかさなどの質的な感じ、「前向きな気持ち」や「挫折」などの感情表現、全身を使ったメリハリのあるダイナミックな動き、音楽のリズムにのせた動きの表現の仕方、及び、移動やフォーメーションのつくり方などを取り入れた。振付は筆頭著者を中心に、複数の共同研究者と検討した。「ALIVE」を選んだ理由として、文部科学省(2013)¹¹⁾が「床を使った極限的な動きや移動の動きを入れたりして動きに変化をつけて続けて踊る」のに適切として挙げているBPM(Beats Per Minute)100程度のゆっくりとしたテンポであることと、抑揚のある曲調で感じを込めやすいことが挙げられる。

具体的な指導として、指導者は1つ1つの動きを確実に習得させるため、ゆっくりカウ

ントをとりながら見本を見せることを心がけた。また、「大きく手を伸ばそう」、「止まる場所はしっかり止まってメリハリをつけよう」など、ダンス経験がない生徒に対してもわかりやすい言葉を使いながら、どのような動きが良い動きか見本を見せながら伝えた。

2. 3 倫理的配慮

本研究は、協力校の学校長および保健体育科教師に、研究計画および調査内容について、文書および口頭で十分な説明を行い研究の同意を得て行われた。調査は、体育の授業中に実施された。その際、調査の目的、調査が成績とは関係のないこと、参加したくない場合は回答しなくてもよいこと、および、回答しなくても不利益を被ることはないことが生徒に十分に説明され、生徒の同意を得た上で行われた。なお、本研究は大阪体育大学倫理審査委員会の承認(29-55)を得て行われた。

2. 4 調査項目

調査は、1時間目と3時間目のまとめ時に、T2の保健体育科教師によって実施された。本研究では、指導内容の異なる2つのダンス授業を初めて受けた際の生徒のダンス授業に対する自己評価、および、生徒の心理状態(気分)を調査するため、1時間目に行った即興型ダンスと、3時間目に行った習得型ダンスを調査対象とした。

2. 4. 1 ダンス授業に対する生徒の自己評価

自己評価の質問項目については、要領⁴⁾で示された3つの目標である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の視点から以下の5項目を設定し、それぞれ体育科教育とダンス教育の専門家である筆頭著者と共同研究者が、生徒

が答えやすい文言を考えた。以下は5つの質問項目である。

「知識・技能」に関する質問は、「質問1：恥ずかしがらずにどうどうと踊れたか」、「質問4：思い切り大きく体を動かせたか、はっきりと感じを込めて踊れたか」、「質問5：よい動きとはどんな動きか、効果的な表現方法についてわかったか」であった。「思考力・判断力・表現力等」に関する質問は、「質問3：ふさわしい動き方やまとめ方を工夫し、自分の意見を発言できたか」であった。「学びに向かう力・人間性等」に関する質問は、「質問2：友達のいいところを認められたか」であった。

これら5つの質問項目に対して、「1：もう少し」、「2：できた」、「3：とてもよくできた」の3件法を採用した。この理由として、本研究ではダンス未経験者が多い中学校のダンス授業を対象としていることから、ダンスの動きや表現に対する生徒の自己評価が難しいのではないかということが想定された。そのため、回答が集中しないように「どちらでもない」という項目をつくらず、先に示した3項目による自己評価にすることとした。

2. 4. 2 二次元気分尺度

指導内容が異なる2つの授業を学習した生徒の心理状態（気分）を測定するため、坂入ほか（2003）¹²⁾が開発した二次元気分尺度（Two-Dimensional Mood Scale, TDMS）を用いた。本尺度は坂入ほか（2003）¹²⁾によって信頼性および妥当性が確認されていた。また、本尺度は回答者に負担が少ないことと、短時間内での心理状態（気分）の変化に適していることが特徴である。

二次元気分尺度は、8項目の質問（「ア：落ち着いた」、「イ：イライラした」、「ウ：無気力な」、「エ：活気にあふれた」、「オ：リラッ

クスした」、「カ：ピリピリした」、「キ：だらけた」、「ク：イキイキした」）により構成され、「全くそうでない」から「非常にそう」までの6段階で回答するものであり、ここから回答者の「活性度」、「安定度」、「快適度」、「覚醒度」の心理状態（気分）を測定することができる。

本研究では生徒に授業のまとめ時である5分間で回答を求めた。

2. 5 統計分析方法

本研究では、指導内容の違いが生徒の自己評価、および、心理状態（気分）に及ぼす影響を検証するため、対応のある t 検定を用いた。

また、自己評価の高い生徒（高群）と低い生徒（低群）の心理状態（気分）の比較をするため、自己評価の高低を独立変数、二次元気分尺度を従属変数として、2要因分散分析を行った。高低群については、まず、1時間目のダンス授業に対する生徒の自己評価について中央値を算出し、この中央値をもとにクラスを2群にわけた。次に、クラス全体の度数分布に基づき、中央値より上を高群、中央値より下を低群とした。

分析には、IBM SPSS for Windowsを用いた。有意水準は5%とした。なお、全ての授業に出席し、記入漏れがなく全ての調査データが揃っている生徒24名を分析対象とした。

3. 結果

3. 1 ダンス授業に対する生徒の自己評価の結果

指導内容の違いがダンス授業に対する生徒の自己評価に及ぼした影響を検証した結果、即興型ダンスと習得型ダンスの自己評価において、質問1、質問3、質問4、および、質

問5の平均値間に有意な差はみられなかった(質問1; $t(23) = -1.30, p=0.21$. 質問3; $t(23) = -1.90, p=0.07$. 質問4; $t(23) = -0.83, p=0.57$. 質問5; $t(23) = -0.30, p=0.77$). 質問2においては、習得型ダンスに対する自己評価の平均値は、即興型ダンスよりも有意に高値を示した(質問2; $t(23) = -3.08, p=0.01, p<0.05$) (表2).

3. 2 二次元気分尺度の結果

指導内容の違いが生徒の心理状態(気分)に及ぼす影響を検証した結果、即興型ダンスと習得型ダンスの二次元気分尺度において全

ての項目の平均値間に有意な差はみられなかった(活性度; $t(23) = -0.155, p=0.13$. 安定度; $t(23) = 0.33, p=0.74$. 快適度; $t(23) = -0.100, p=0.33$. 覚醒度; $t(23) = -1.39, p=0.18$) (表3).

3. 3 自己評価の高低群における二次元気分尺度の結果

自己評価の高い生徒(高群)と低い生徒(低群)の心理状態(気分)の比較をするため、2要因分散分析を行った。

その結果、指導内容と高低群における交互作用(活性度: $F=0.82, p=0.37$. 安定度:

表2 ダンス授業に対する生徒の自己評価の平均値, 標準偏差, および, t 検定の結果 ($N=24$)

| | 即興型ダンス | | 習得型ダンス | | t 値 | p 値 |
|---------------------------------------|--------|------|--------|-------|-------|------------------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 質問1 恥ずかしがらずにどうと踊れたか | 2.13 | 0.61 | 2.38 | 0.71 | -1.30 | 0.21 <i>n.s.</i> |
| 質問2 友達のいいところを認められたか | 2.63 | 0.49 | 2.92 | 0.28 | -3.08 | 0.01* |
| 質問3 ふさわしい動き方やまとめ方を工夫し、自分の意見を発言できたか | 1.79 | 0.66 | 2.17 | 0.82 | -1.90 | 0.07 <i>n.s.</i> |
| 質問4 思い切り大きく体を動かせたか、はっきりと感じを込めて踊れたか | 2.33 | 0.56 | 2.42 | -0.57 | -0.83 | 0.57 <i>n.s.</i> |
| 質問5 よい動きとはどんな動きか、効果的な表現方法についてわかったか | 2.46 | 0.66 | 2.50 | 0.59 | -0.30 | 0.77 <i>n.s.</i> |

M : 平均値, SD : 標準偏差 * : $p < .05$

表3 二次元気分尺度の平均値, 標準偏差, および, t 検定の結果 ($N=24$)

| | 即興型ダンス | | 習得型ダンス | | t 値 | p 値 |
|-----|--------|------|--------|------|-------|------------------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 活性度 | 5.75 | 3.25 | 6.46 | 2.84 | -1.55 | 0.13 <i>n.s.</i> |
| 安定度 | 4.75 | 3.25 | 4.63 | 3.16 | 0.33 | 0.74 <i>n.s.</i> |
| 快適度 | 10.50 | 5.67 | 11.08 | 5.17 | -1.00 | 0.33 <i>n.s.</i> |
| 覚醒度 | 1.00 | 3.16 | 1.83 | 3.06 | -1.39 | 0.18 <i>n.s.</i> |

M : 平均値, SD : 標準偏差 * : $p < .05$

表4 自己評価の高低群における二次元気分尺度の平均値、標準偏差、および、2要因分散分析の結果（高群；N=14，低群；N=10）

| | 即興型ダンス | | | | 習得型ダンス | | | | 指導内容 | 群 | 交互作用 |
|-----|--------|------|------|------|--------|------|------|------|------|------|------|
| | 高群 | | 低群 | | 高群 | | 低群 | | | | |
| | M | SD | M | SD | M | SD | M | SD | | | |
| 活性度 | 6.64 | 3.61 | 4.50 | 2.27 | 7.00 | 3.21 | 5.70 | 2.16 | 2.81 | 2.26 | 0.82 |
| 安定度 | 5.00 | 3.49 | 4.40 | 3.03 | 5.07 | 3.41 | 4.00 | 2.83 | 0.18 | 0.42 | 0.37 |
| 快適度 | 11.64 | 6.33 | 8.90 | 4.41 | 12.07 | 5.74 | 9.70 | 4.14 | 1.04 | 0.09 | 1.42 |
| 覚醒度 | 1.64 | 3.20 | 0.10 | 3.04 | 1.93 | 3.29 | 1.70 | 2.87 | 2.41 | 0.60 | 1.17 |

M：平均値，SD：標準偏差 *： $p < .05$

$F=0.37$, $p=0.55$. 快適度： $F=0.09$, $p=0.76$. 覚醒度： $F=1.17$, $p=0.29$.) に有意な差はみられなかった. また, 指導内容の主効果(活性度： $F=2.81$, $p=0.11$. 安定度： $F=0.18$, $p=0.68$. 快適度： $F=1.04$, $p=0.32$. 覚醒度： $F=2.41$, $p=0.13$), および, 自己評価の高低群の主効果(活性度： $F=2.26$, $p=0.15$. 安定度： $F=0.42$, $p=0.52$. 快適度： $F=0.09$, $p=0.25$. 覚醒度： $F=0.60$, $p=0.45$.) に有意な差はみられなかった(表4).

4. 考察

本研究の目的は, ダンス授業における指導内容の違いが, 第1にダンス授業に対する生徒の自己評価に, 第2にダンス授業を受けた生徒の心理状態(気分)に, 第3にダンス授業に対する自己評価が高い生徒と自己評価が低い生徒の心理状態(気分)にどのような影響を及ぼすかについて明らかにすることであった.

4.1 ダンス授業に対する生徒の自己評価について

生徒の自己評価を検証した結果, 「質問2: 友達のいいところを認められたか」について, 習得型ダンスの自己評価の平均値が即興型ダンスよりも有意に高かった.

まず, 習得型ダンスは定型の動きを教えるといった特性から, 生徒にとってどのような動きがよい動きかというダンスの技能に対する目標が, 即興型ダンスよりも明確だったのではないかと考えられる. 習得型ダンスと同じく定型のステップを教える「現代的なリズムのダンスの授業」に関する研究¹³⁾では, 女子の学習者は, 目標や今なすべきことを明確に示すことで学習意欲が高まることが示唆されている. それに加えて, 石田(2014)¹⁴⁾はクラスメイトの学習意欲や授業態度は影響を及ぼし合い, 両者の類似性を高めることを明らかにしている.

今回の習得型ダンスでは, 授業の特性から生徒がダンスの動きの目標を明確に捉えられたことで, 友達の動きを評価しやすかったこと, 並びに, 学習意欲の高まりによって生徒同士がポジティブな影響を及ぼし合ったことで, 友達の良いところを認められたのではないかと推察される.

以上から, 生徒がダンスの技能の面について明確な目標を持つことができると, 学びに向かう力の観点に繋がる可能性が示唆された.

4.2 ダンス授業を受けた生徒の心理状態(気分)について

ダンス授業を受けた生徒の心理状態(気分)

について、即興型ダンスと習得型ダンスとでは、差がみられなかった。

その理由について、ダンス授業では音楽を用いることで学習者の気分が向上することが明らかとなっており¹⁵⁾⁻¹⁶⁾、本研究ではどちらの授業においてもウォーミングアップから授業のまとめである発表に至るまで、音楽を使用していたことが考えられる。それに加えて、内山ら(2014)¹⁵⁾は、楽しいダンス授業を展開するためには、「ペアワークやグループワークを採り入れること」と述べており、本研究ではどちらの授業においても、仲間と踊ったり意見交換をしたりするなどダンスを通して双方でコミュニケーションを取れる時間を設けたことで、授業間における生徒の心理状態(気分)に差がなかったと考えられる。

以上から、指導内容が違っていても、音楽を使用したワークを用いることや、ダンスを通して双方でコミュニケーションを取れる時間を設けるなど指導者が場の設定を工夫することによってダンス授業に対する生徒の心理状態(気分)に差がないことが示唆された。

4. 3 ダンス授業に対する自己評価が高い生徒と自己評価が低い生徒の心理状態(気分)について

ダンス授業に対する自己評価の高低群間において、心理状態(気分)に有意な差はみられなかった。

その理由として、即興型ダンスでは二人組や四人組で仲間の動きを模倣したり、即興型ダンス及び、習得型ダンスでは踊りを見合う活動をしたりして仲間の動きのよかったところを伝え合う場面を設定したことで、授業を通して生徒全体にどんな動きでも肯定的に捉えていく雰囲気が形成されたことが考えられる。体育における先行研究では、「肯定的なフィードバックを用いた体育授業」は体育に

おける肯定的なイメージを持つことに繋がる¹⁷⁾。今回のダンス授業では、生徒同士における意見交換に加え、指導者も生徒に対して肯定的な言葉がけを行っていたことから、自己評価の低い生徒も自己の動きに自信を持ち取り組むことができたのではないかと考えられる。

また、内山ら(2014)¹⁵⁾は、ダンスに対して有能さを感じられない学習者であっても、「仲間と一緒に取り組んでいると感じる悦び」があれば楽しさを感じられると述べており、今回の授業ではどちらにおいても踊りを通して仲間と交流する機会を設けたことによって、自己評価の高い生徒、及び、低い生徒の心理状態(気分)に差が生じないといった結果に繋がったのではないかと考えられる。

以上から、どちらの授業においても、仲間と踊る喜びを生徒がどんな動きでも肯定的に捉えられるよう、仲間のよいところを認め、伝え合う場面を設定したことにより、ダンス授業に対して自己評価の高い生徒においても低い生徒においても、心理状態(気分)に影響が出なかったことが示唆された。

5. 結論

本研究は、即興型ダンスと習得型ダンスという、ダンス授業における指導内容の違いが、生徒の自己評価や心理状態(気分)にどのような影響を及ぼすか明らかにすることを目的とした。その結果、以下の3点が示された。

第1に、習得型ダンスの方が即興型ダンスよりも生徒の技能に関する認識に対してよい影響を及ぼしたこと、第2に、即興型ダンスと習得型ダンスでは、生徒の心理状態(気分)に与える影響について差は認められなかったこと、第3に、ダンス授業に対する生徒の自己評価の高低が生徒の心理状態(気分)に影響

響を及ぼさないことが示された。

要領⁴⁾で掲げられている創作ダンスのねらいには、「多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて即興的に表現すること」とあるが、本研究では習得型ダンスが生徒にとって良い動きの見本となる可能性が示されたことから、創作ダンスのステップ学習として、多様な動きを学ばせる手立てになると考えられる。そして、習得型ダンスにおける多様な動きの経験は即興型ダンスにおける、良い動きを引き出すステップにも繋がる可能性が考えられる。

ダンス授業の指導内容の違いに心理状態(気分)の差は見られなかったが、それぞれの授業の特徴を理解し、活かすことでより質の高いダンス教育につながるのではないかと考えられる。今後の課題として、クロスオーバーデザインでの効果の検討や、調査対象を増やし男女混合クラスを対象とした質的な分析を検討する必要があると考える。

文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 保健体育編，2008
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFicsF/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf, (参照日2023年7月19日)
- 2) 中村恭子：中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容－平成19年度，20年度，および24年度の年次推移から－，日本女子体育連盟学術研究，26，1-16，2009
- 3) 高橋和子：中学校における武道・ダンスの指導状況等の調査，平成26年度文部科学省委託事業報告書，1-69，2015
- 4) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 保健体育編，2017
https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_1.pdf (参照日2023年7月21日)
- 5) 村田芳子：表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ，体育科教育，56 (3)，14-18，2008
- 6) 中村恭子・浦井孝夫：ダンスの学習内容と楽しさの検討－創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較－，順天堂大学スポーツ健康科学研究，10，65-70，2006，p.10
- 7) 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子：体育科教員のダンス指導不安の探索的研究，日本教育工学会論文誌，42，125-135，2017
- 8) 茅野理子：栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について－ダンス必修化に関するアンケート調査から－，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，36，25-32，2013
- 9) 寺山由美：「表現運動」を指導する際の困難さについて－千葉県小学校教員の調査から－，千葉大学教育学部紀要，55，179-185，2007
- 10) 高田康史・松尾千秋・矢野下美智子：現代的なリズムのダンス授業における学習内容の検討－「ステップ習得学習」と「自由な運動学習」の比較を通して－，広島体育学研究，40，9-20，2014
- 11) 文部科学省：表現運動系及びダンス指導の手引，株式会社東洋館出版社，2013
- 12) 坂入洋右・徳田英次・川原正人・谷木龍男・征矢英昭：心理的覚醒度・快適度を測定する二次元気分尺度開発，筑波大学体育科学系紀要，26，27-36，2003
- 13) 内山須美子・山路学：「現代的なリズムのダンス」の学習意欲・好意・有能感に関する研究，白鷗大学教育学部論集，6，67-

90, 2012

- 14) 石田靖彦：学級内の友人関係が生徒の学習意欲に及ぼす影響－友人の学習意欲の高さと、生徒の有能感に着目した検討－，愛知教育大学研究報告．教育科学編，63，137-143，2014
- 15) 内山須美子・阿久津隼佑：ダンス学習の楽しさに関するテキストマイニングによる分析，白鷗大学教育学部論集，8，89-114，2014
- 16) 村田芳子：生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究，日本女子体育連盟学術研究，21，21-44，2004
- 17) 松井高光・柳原朱里・久保田浩史・木村昌彦・山本耕太・橋口剛夫長見真・持田尚・田村昌大・吉鷹幸春・岩沼聡一朗・帝京科学大学・横浜市立宮谷小学校・東京学芸大学・横浜国立大学・桐蔭横浜大学：体育に肯定的な印象を持つための授業づくり－アンケートによる過去の体育授業に関する実態調査から－，帝京科学大学教育・教職研究，7 (1)，23-30，2021